

正論大賞に渡辺利夫氏

中国の海洋覇権に警鐘

第27回正論大賞に拓殖大学総長・学長の渡辺利夫氏(72)＝写真上、第12回正論新風賞に学習院大学教授の井上寿一氏(55)＝同下＝がそれぞれ決まった。＝4面に受賞の言葉・特集

新風賞は井上寿一氏

渡辺氏は開発経済学、アジア経済研究の権威。高成長を遂げる東アジアにおける中国の海洋覇権主義に警鐘を鳴らし、東アジア共同体の危険性や日米同盟の強化など、日本がとるべき針

路についての提言を行ってきた。経済学はもとより政治や安保などカバーする領域は幅広く、歴史的考察やリアリズムに基づいた大局的な視点が「正論大賞」にふさわしいとされた。



井上氏は日本政治外交

史、歴史政策論を専門とする。国家ビジョンの再構築の手がかりを昭和戦前期に求め、その時代の教訓から新しい国家像を模索する試みを続けてきた。米国の関与の重要性を指摘し、日本外交の目指すべき方向性を提唱。昭和史を掘り起こす意欲的な論評が高く評価さ

れた。両氏とも産経新聞

「正論」欄執筆メンバー。

正論大賞はフジサンケイグループの基本理念である「自由と民主主義のために闘う正論路線」を発展させた学者、文化人らに贈られる年間賞で昭和60年に創設。正論新風賞は、新進気鋭の言論人を見いだして顕彰しており、平成12年に制定された。

正論大賞の正賞はブロンズ彫刻「飛翔」(御正進氏制作)、副賞は賞金100万円、正論新風賞の正賞は同「ソナチネ」(小堤良一氏制作)で、副賞は賞金50万円。

贈呈式は来年2月22日、東京都港区のグランドプリンスホテル高輪で行う。

第27回

第27回正論大賞に決まった拓殖大学総長・学長の渡辺利夫氏と第12回正論新風賞に決まった学習院大学教授の井上寿一氏が受賞の言葉を寄せ、日本の向かうべき指針、国家再建のための政策提言への決意を語った。

拓殖大学総長・学長 渡辺利夫氏

共同体を再生せよ

大賞



多くの日本人は、長らく忘れていたある大切なものを東北の被災民の中に発見して深い感銘を覚えたのではない。小さな農漁山村に住まい心を通わせながら生きる、日本人の原郷としての、しなやかな共同体のありようである。血縁や地縁に連なる人々を一瞬のうちのみ込んだ天の非情を感みながら、なお生ける者が寄り添い乱れることなく復旧へと向かうその姿に、肅然たる思いを深めた日本人は少なくないであろう。

家族を中心とした血縁共同体、それを取り巻く地縁共同体なくして人間は

〈わたなべ・としお〉昭和14年、甲府市生まれ。慶応義塾大学卒業、同大学院修了。経済学博士。第17期学術会議会員。筑波大学教授、東京工業大学教授などを歴任。山梨総合研究所理事長。主な著書は「成長のアジア 停滞のアジア」(吉野作造賞)「開発経済学」(大平正芳記念賞)「西太平洋の時代」(アジア太平洋賞大賞)「神経症の時代」(開高健賞正賞)「新脱亜論」など。

生をまっとうできない。戦後の日本人はこのあまりにも当たり前のことを没却し、自由な個として生きることが何か善きことであるかのような幻想を抱かされてきたのであろう。幻想の帰結が、流砂のようにまとまりのない日本の空漠たる光景である。

共同体の原形、家族すらもが解体の危機に瀕している。核家族など、はるかなる存在となってしまいかねない。夫婦と二人の子供から成る標準世帯の数は単身世帯数よりすでに少ない。これは自由な個の選択の結果であり、受容されるべきものだと言張するジャーナリズムがある。無思想もここに極まる。家族がもつ人口再生産のメカニズムを毀損してまともな社会が組成できるはずもない。

共同体を再生させねばならない。共同体の消滅は進歩ではない。「進歩に対する迷信」(宮本常一*)である。

「解釈を拒絶して動じないもの」(小林秀雄*)だけが意味ある存在なのだ。家族を通じて継承される血脈、血脈を中心として同心円のように広がる地縁共同体、血縁・地縁という基礎的単位を幾層にも織り込んで形づくられる政治的共同体としての国家、国家のこの原像を発見しようという構えをもたなければ、日本の将来は危うい。中国が私の思想の対称軸である。

一度だけ親孝行をしたことがある。もう三十数年も前のことだが、文系ではまだ珍しかった博士号を取得した時、父が「長生きしているといいことももあるもんだ」といって一族を集め祝宴を開いてくれた。その時の父の年齢を今の私はどうに超えている。正論大賞というこの上ない栄誉を授かった。

「長生きしてればいいこともあるってことよね」と今度は妻が言う。伝統を重んじ、これを日本が向かうべき指針とする、そういう言説を、老い先は短いが、その分だけ深く論じたいと思う。

* 『民俗学の旅』(講談社学術文庫)
* 『モーツァルト・無常という事』(新潮文庫)

正論大賞